

書道甲子園中止で地元2校演技 四国中央

新型コロナウイルスの影響で、目指していた全国高校書道パフォーマンス選手権大会(書道パフォーマンス甲子園)が中止になった四国中央市の川之江、三島両高校の書道部がこのほど、同市妻鳥町の市民文化ホール「しこちゅ〜ホール」のイベントで書道パフォーマンスを披露した。思いの丈を筆に乗せ、堂々とした演技とともに力強いメッセージを発信。市民らを元気づけた。



コロナ禍の苦境を乗り越えるメッセージを表現する三島高のパフォーマンス(上)と作品(下)

思いの丈筆に乗せ

川之江 仲間ともう一度「進」

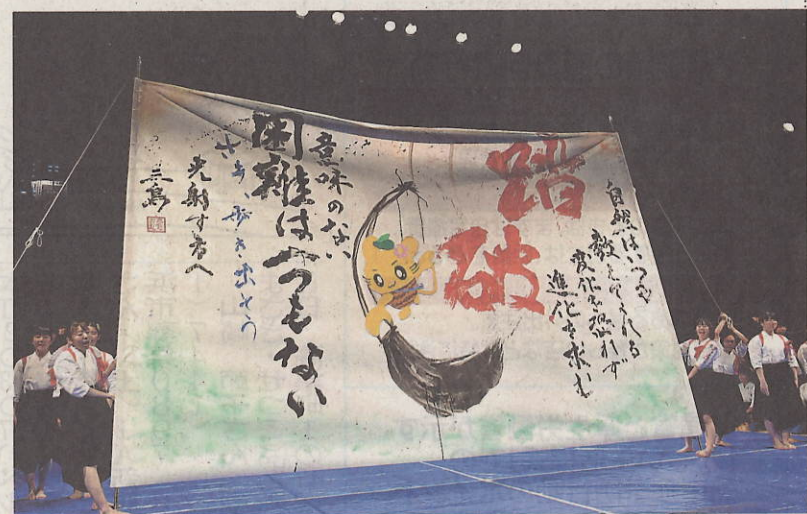


「当たり前」の幸せをかみしめ、ともに進もうとの思いをパフォーマンスに込める川之江高の書道部員(上)と作品(下)

地元ケーブルテレビ局四国中央テレビと同ホールが、7月の週末夜に計4回開催した映像上映イベント「しこちゅ〜ほつこりナイト」の最終回として7月31日に実施した。敷地内の屋外広場に

三島 みんなで試練「踏破」

舞台を設けて観客の前で演技する予定だったが、全国的なコロナ感染拡大を受けた対策として生徒は小ホールで演技。観客は大ホールで生中継を見る形となった。



大会と同じ縦4段、横6段の紙を演技で使用。先に舞台に立ったのは三島で、3年生を含む全11人が登場した。「意味のない困難は一つもない」と記し、みんなで試練を乗り越えて進化しようとの思いを込めた。最後は真っ赤な字で「踏破」と勢いよく大書した。

それぞれの演技が終わると、大ホールの市民約170人が温かい拍手を送った。「しんどい思いをしていたが、勇気づけられた」「頑張ろうという気持ちにしてくれた」などの声が続けられた。

両校とも期末試験後の7月上旬から練習を高めてきた。三島高3年の森川愛梨部長(17)は、書道パフォーマンス甲子園の中止を伝えられた当時を「喪失感や悔しさが大きかった」と振り返ったが、高校最後の演技を終え「笑顔で、全力で頑張れた」と胸を張った。

川之江高3年の石川真里部長(18)は、多くの人が関わって練習成果を披露する場を設けてくれたことに感謝。後輩に「た〜さんの人を笑顔にするパフォーマンスをしてほしい」との思いを託した。

昨年の大会で優勝した松本蟻ヶ崎高(長野県)も同校からオンラインで「生出演」。華やかな踊りと力強い書で観客を魅了した。

(菅亮輔)